様式第７号

議長	副議長	局長	次長	主幹	係長	係員

行政視察報告書

令和　7年　12月　25日

笠岡市議会議長　殿

（出張者）議員　村上　太志　㊞

下記のとおり行政視察を実施したのでその結果を報告します。

記

【1】京都大学起業部

住　所	京都府京都市左京区吉田本町
電　話	075-753-7531
視察案件	起業を起点にして関係人口を創出する方法について
期　日	令和　7年12月18日（木）　12時50分 から　14時20分 まで
応対者	京都大学起業部 前部長　(株) カタルシス 代表取締役 山本周雅 様 京都大学起業部 部長　(株) AI就活 人材事業部 運営責任者 久次佑宜 様
視察状況	別紙写真のとおり
訪問施設	Katharsis（カタルシス）　京都市左京区田中門前町28-14 吹上ビル 3階 ※京都大学起業部 活動拠点

概　　要	京都大学起業部は学生や起業家が相互に刺激し合うコミュニティ型の組織である。月2回の定例会や他大との合同デモ会，地域と交流する会などを通じ，実践的な事業の進捗共有を重視している。運営はOBの支援等により会費無料で5年以上継続している。具体的な手続きよりも今熱い事業ネタの共有が中心で，インキュベーターとしての機能を持つ。学生は低コストなAI・IT分野での起業が主流であり起業を「ポータブルスキル」として捉え，卒業後は就職する者もいるが，再起業を目指す循環が生まれている。 京都大学起業部における取組は、単なる学生起業支援に留まらず、世代や組織を越えた接点の創出を通じ、若者の関係人口を継続的に生み出す仕組みとして機能していることが印象的であった。特に、在学生のみならず 社会の第一線で活躍する若手OBとの密な交流が、学生にとって自身の将来像を現実的に描く契機となり、起業を人生設計の中で「選択肢のひとつ」として捉え直す素地を形成していた点は注目に値する。 また、起業の芽を育てる際、抽象的なアイデア募集や形式的なビジネスコンテストでは、結果が“ふわっと”しがちであるという指摘は示唆に富む。京都大学起業部が、具体的な事業の進捗共有を中心に据え、その熱量を相互に可視化する場を重視していることは、結果として参加者の主体性を高め、事業化・再挑戦の循環につながっていた。 この姿勢は、支援の「規模」よりも 支援の“質”と“目的の明確さ” が成果に直結することを再認識させるものであった。 人口減少局面にある笠岡市においても、若者の流出は避けがたい現実である。しかし、若い世代が一度市外に出たとしても、“また笠岡で挑戦したい”と思える基盤を構築できれば、起業は関係人口の再接続点となり得る。 そのためには、 • 市民・若者・外部人材が交わる場の創出 • 目的を明確にした起業支援・挑戦の場づくり • 伴走型で、挑戦の“回数”を許容する支援文化 といった要素を組み合わせ、**「起業という選択肢を通じて笠岡と再びつながる循環」**を設計することが求められると感じた。 京都大学起業部の事例は、単に起業者を増やすという量的支援ではなく、挑戦者と地域の関係を長期的に育むという質的アプローチの重要性を示しており、今後の笠岡市の取組にとって大いに参考となる。
添付書類	視察状況写真　　名刺

【２】QUESTION（京都信用金庫）

住　　所	京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町390－2
電　　話	075-585-4190
視察案件	共創施設を使った多世代交流の仕組みについて
期　　日	令和　７年１２月１９日（金）　１０時００分 から　１２時００分 まで
応 対 者	京都信用金庫 QUESTION 館長 平野哲広 様 株式会社ツナグム 代表取締役 田中篤史 様 認定NPO法人 グローバル人材開発センター コーディネーター 三谷翔 様
視察状況	別紙写真のとおり
訪問施設	QUESTION

概　　要	QUESTIONは，京都信用金庫が運営する「問い」から新たな価値を生み出すための共創施設である。京都市中京区の河原町御池に位置し，多様な人々が集い，一人では解決できない地域の課題や個人の問いに対して，対話を通じて答えを探る場となっている。館内は，誰でも利用できる1階のカフェバーから，コワーキングスペース，学生専用ラボ，コミュニティキッチン，さらには実際の銀行店舗までを備える。 QUESTIONの取組は、多世代が行き交う“場”を起点に、地域に潜在する資源や問いに光を当て、対話と伴走を通じて価値を耕していくプロセスに特徴があると感じた。 特に印象的であったのは、拠点整備そのものを目的とせず、「人」が集まることで生まれる“問い”を価値創出の出発点とする思想である。場があるから人が集まり、人が交わるから問いが立ち、問いに向き合う過程の中から新しいアイデアや活動が芽生え、結果として地域が活性化する循環が形成されていた。 また、QUESTIONでは、金融機関が地域における中長期的な関係の担い手として機能しており、短期的な成果やイベントに留まらず、「まちを育てる／耕す」時間軸で地域と伴走している点が示唆に富む。これは、人口減少下の自治体において、持続可能な地域づくりの基盤となる視点である。 さらに、地域の魅力や資源について、**外部の視点や多様な参加者の目線を通じて“解像度を上げる”**ことの重要性を改めて認識した。地元では当たり前になり埋もれてしまう資源も、問い直し、語り直すことで新たな価値として立ち上がる。 このアプローチは、新たな箱物に頼らずとも、既に存在する「人・場所・活動」を編集し直すことで地域の力を引き出す可能性を示すものであった。 笠岡市においても、 • まず動いている人や活動に焦点を当てること • 人が交わる“場”を継続的に支える仕組みを育てること • 問いが生まれる環境を意図的に設計し、対話と伴走を織り込むこと などを通じて、**若者や市外人材が「また笠岡で関わりたい」と思える循環を形成できると感じた。 場・問い・人の三位一体の設計こそが、今後の地域政策における重要な指針となると考える。
添付書類	視察資料　　視察状況写真　　名刺